

印度更紗

泉鏡花

青空文庫

「鸚鵡さん、しばらくね……」

と真紅へ、ほんのりと霞をかけて、新しい火の※と移る、棟瓦が夕春日を噛んだ
 状なる瓦斯暖炉の前へ、長椅子を斜に、ト裳を床。上草履の爪前細く※娜に腰を掛け
 た、年若き夫人が、博多の伊達巻した平常着に、お召の紺の雨緋の羽織ばかり、繕は
 ず、等閑に引被けた、其の姿は、敷詰めた絨氈の浮出でた綾もなく、袖を投げた椅
 子の手の、緑の深さにも押し沈められて、消えもやせむと淡かつた。けれども、美しさは、
 夜の雲に暗く梢を蔽はれながら、もみぢの枝の裏透くばかり、友染の紅ちらちらと、櫛
 巻の黒髪の濡色の露も滴る、天井高き山の端に、電燈の影白うして、揺めく如き暖炉
 の焔は、世に隠れたる山姫の錦を照らす松明かと訝ゆ。
 博士が旅行をした後に、交際ぎらひで、籠勝ちな、此の夫人が留守した家は、まだ
 宵の間も、實際蔦の中に所在の知るゝ山家の如き、窓明。
 広い住居の近所も遠し。

久しぶりで、恚こうして火を置かせたまゝ、氣に入りの小間使さへ遠ざけて、ハタと扉ひらを閉とじた音が、訝こだするまで響いたのであつた。

夫人は、さて唯一ただ一人、壁に寄せた塗ぬり柵だに据置すえいた、籠かごの中なる、雪衣せつの鸚鵡おうむと、差さ向かひに居るのである。

「御機嫌よう、ほゝゝ、」

と苔つぼみを含んだ趣おもむき、鸚鵡てりの雪に照添そふ唇くち……

籠かごは上に、柵たはの丈だけ稍高ければ、打仰うちあぐやうにした、眉まゆの優しき。鬢びんの毛はひたくと、羽織えりの襟えりに着きながら、肩うなも頸じも細かつた。

「まあ、挨拶あいさつもしないで、……黙然だんまりさん。お澄あましですこと。……あゝ、此の間あいだ、鳩はとにぼツかり構かまつて居たから、お前まへさん、一寸ちよお冠かんむりが曲まりましたね。」

此この五日いつか六日むい、心こころ持もち煩わづらはしければとて、客あにも逢あはず、二階ひとの一室まに籠きりりツ切きりで、寝起ねおの隙ひまには、裏庭うらの松この梢こす高えき、城しろのもの見みのやうな窓まどから、雲うと水色みづの空そらとを觀みながら、徒然つれづれにさしまねいて、蒼空あおぞらを舞まふ遠方おちかたの伽藍がらんの鳩うを呼よんだ。——真白まなのは、掌てのひへ、紫むらなるは、かへして、指環ルビイの紅玉こうの輝あく甲こうへ、朱鷲とき色いろと黄あの脚あしして、軽かく来こて留とまるまでに馴なれたのであつた。

「それく、お冠の通り、くちばし嘴が曲つて来ました。目をくるく……でも、やっぱ矢張り可愛いねえ。」

と艶麗あでやかに打傾うちかたむき、

「其の替り、今ね、寝ながら本を読んで居て、面白い事があつたから、お話をして上げようと思つて、わざわざ故々遊びに来たんぢやないか。途中が寒かつたよ。」

と、ひし犇と合はせた、りようそで両袖堅く緊つたが、こぼ溢るゝ蹴出し柔かに、つま褌が一靡ひとなびき落着いて、胸を反そらして、顔を引き、

「否いいえ、まだ出して上げません。……お話を聞かなくツちや……でない袖を啣くわへたり、乗つたり、いたずら悪戯をして邪魔なんですもの。」

お聞きなさいよ。

可いいかい、お聞きなさいよ。

まあ、ねえ。

座敷は——かしやだてこんな貸家建ぢやありません。壁も、床も、皆彩色さいしきした石を敷いた、あ明放けはなした二階の大広間、きやくま客室なんです。

おもて外面の、インド印度洋に向いた方の、大理石の廻り縁まわえんには、軒のきから掛けて、床ゆかへ敷く……水晶

の簾すだれに、星の数々ちりば鏤くさばなめたやうな、ぎやまんの燈籠とうろうが、十五、晃々きらきら点ちいて並んで居ます。草花くさばなの絵えの蠟燭ろうそくが、月の桂かつらの透かくやうに。」
と襟えりをおさへた、指ゆびの先。

二

引合ひきあはせ、又袖そでを当あて、

「丁ちようど、まだ灯あかしを入いれたばかりの暮くれ方がたでね、……其そのの高たか楼かどから瞰み下おろされる港みなと口ぐちの町まち通とおには、焼しょう耐うち売ゆうだの、雜貨屋あふらうりだの、油あぶら売うりだの、肉屋にくやだのが、皆みな黒くろ人んぼに荷車ひを曳ひかせて、……商あきんど人ひとは、各それぞれ自ぜんに、ちやるめらを吹ふく、さゝらを摺する、鈴ベルを鳴ならしたり、小太鼓こたいこを打うつたり、宛然まるでお神楽かぐらのやうなんですがね、家うちが大おいから、遠とほくに聞きえて、夜中よなかの、あの魔まもののお囃子はやし見みたやうよ、……そして車くるまに着あいた商あきんど人ひとの、一人ひとり々々、穂長ほながの槍やりを支たつたり、担かいだりして行く形かたちが、ぞろぞろ影かげのやうに黒くろいのに、椰子やしの樹きの茂さかつた上うへへ、どんよりと黄色きいろに出でた、月の明あかりで、白刃しらばばかりが、閃ひか々びか、と稲妻いなすまのやうに行交ゆきかはす。

其の向うは、鰐わにの泳ぐ、可おそろし恐おおかわい大河よ。……水みな上かみは幾いくせんり千里だか分らない、天てんじ竺くのね、流りゅう沙うさ河がわの末すえだとき、河幅が三里の上、深さは何なんびやくひろ百尋か分りません。

船のある事……帆柱ほぼしらに巻着まきついた赤い雲は、夕日の余波なごりで、鰐の口へ血の晩御飯を注つぎこ込こむんだわね。

時は十二月なんだけれど、五月のお節句の、此これは鯉こい、其それは金銀の糸の翼、輝にじく虹にじを手鞠てまりにして投げたやうに、空を舞つて居た孔雀くじやくも、最もう庭へ歸つて居るの……燻たきし占しめはせぬけれど、棚に飼つた麝香猫じゃこうねこの強い薫かおりが芬ぶんとする……

同おなじやうに吹ふき通とおしの、裏は、川筋を一つ向うに、夜中は尾長猿おながざるが、キツキと鳴き、カラ／＼カラと安達ヶ原あだち はらの鳴子のやうな、黄金蛇こがねへびの声こゑがする。椰子やし、檳榔子びんろうじの生え茂つた山に添つて、城のやうに築上げた、煉瓦造れんがづくりがざらりと並んで、矢間やまを切つた黒い窓から、弩いしびやの口がづん、と出て、幾つも幾つも仰向あおむけに、星を吞のまうとして居るのよ……

オランダ
和蘭人の館やかたなんです。

其ひとつの、和蘭館オランダかんの貴公子と、其の父親の二人が客で。卓子テエブルの青い鉢、青い皿を圍んで向合むきあつた、唐人とうじんの夫婦が二人。別に、肩には更紗さらきを投掛なげかけ、腰に長剣を捲まいた、目の鋭い、裸はだかの筋骨きんこつの引緊ひきしまつた、威風りんりんの凜々とした男は、島の王様のやうなものなの

……

周圀まわりに、可いいほど間まを置いて、黒人くろんぼの召使めいしが三人で、謹つつしんで給仕きよしに附ついて居いる所。「
と俯目ふしめに、睫毛まつげ濃まく、黒棚くろだなの一ツひとつの仕劃しきりを見た。袖口そでぐち白しろく手を伸のべて、

「あゝ、一人此処ここに居いたよ。」

と言いふ。天窓あたまの大きな、頤あごのしやくれた、如法にょほう玩弄おもちゃの焼やきものの、ペロリと舌しで、西す
瓜喰いかくふ黒人くろんぼの人形にんぎょうが、ト赤あかい目で、額おでこで睨にらんで、灰色おしろいの下唇したくちびるを反そらして突立つたつ。

「……余あり謹つつしんでは居いないわね……一寸ちよいと、お話おはなしの中なかへ出いておいで。」

と手を掛かけると、ぶるりとした、貧乏びんぼう動うぎと云いふ胴揺どうゆりで、ふてくされにぐらく
と拗身すねみに震ふるふ……はつと思おもふと、左ひだりの足あしが股もものつけもとから、ほきりと折よれて、ポンと尻し
持もちを支たいた体ていに、踵かかとの黒くろいのを真向まむきに見みせて、一本いっぴんストンと投出なげだした、……恰あたも可よし、
他ほかの人形にんぎょうなど一いっしよ所に並ならんだ、中なかに交まつて、其処そこに、木彫もくぼにうまごやしを萌黄もえぎで描かいた、
舶来はくわいものの靴くつが片隻かたつぽ。

で、肩かたを持もたれたまゝ、右みぎの跛びつこの黒くろどのは、夫人ふじんの白魚しろうおの細こい指ゆびに、ぶらりと掛かつて、
一ツひとつ、卜前ひらのめりに泳いいだつけ、臀ししきを揺ゆつた珍ちんな形かたちで、けろりとしたもの、西瓜すいかをがぶり。
熟じつと視みて、

「まあ……」

離すと、可いことに、あたり近所の、我朝の姉様を仰向に抱込んで、引くりかへりさうで危いから、不気味らしくも手からは落さず……

「島か、光か、私を掛けて——お待ちよ、否、然うく……矢張これは、此の話の中で、鰐に片足食切られたと云ふ土人か。人殺しをして、山へ遁げて、大木の梢へ攀ちて、枝から枝へ、千仞の谷を伝はる処を、捕吏の役人に鉄砲で射られた人だよ。

ねえ鸚鵡さん。」

と、足を継いで、籠の傍へ立掛けた。

鸚鵡の目こそ輝いた。

三

「あんな顔をして、」

と夫人は声を沈めたが、打仰ぐやうに籠を覗いた。

「お前さん、お知己ぢやありませんか。尤も御先祖の頃だらうけれど——其の黒人も

……和蘭陀人も。」

で、木彫の、小さな、護謨細工のやうに柔かに璧の入った、靴をも取つて籠の前に差置いて、

「此のね、可愛らしいのが、其の時の、和蘭陀館の貴公子ですよ。御覧、——お待ちなさいよ。恚うして並べたら、何だか、もの足りないから。」

フト夫人は椅子を立つたが、前に挟んだ伊達巻の端をキウと緊めた。絨氈を運ぶ上靴は、雪に南天の実の赤きを行く……

書棚を覗いて奥を見て、抽出す論語の第一巻——邸は、置場所のある所とさへ言へば、廊下の通口も二階の上下も、ぎつしりと東西の書もつの揃つた、硝子戸に突当つて其から曲る、……本箱の五ツ七ツが家の五丁目七丁目で、縦横に通ずるので。……こゝの此の書棚の上には、花は丁ど挿してなかつた、——手附の大形の花籠と並べて、白木の桐の、軸ものの箱が三ツばかり。其の真中の蓋の上に……

恚う仰々しく言出すと、仇の髑髏か、毒薬の瓶か、と驚かれよう、真個の事を言ひませう、さしたる儀でない、紫の切を掛けたなりで、一尺三寸、一口の白靴もこの刀がある。

と黒目勝な、意味の深い、活々とした瞳に映ると、何思ひけむ、紫ぐるみ、本に添へて、すらすらと持つて椅子に帰つた。

其だけで、身の悩ましき人は吻と息する。

「さあ、此の本が、唐土の人……揃つたわね、主人も、客も。

而して鰯の晩飯時分、孔雀のやうな玉の燈籠の裡で、御馳走を会食して居る……一寸、其の高楼を何処だと思ひます……印度の中のね、蕃蛇刺馬……船着の

貿易所、——お前さんが御存じだよ、私よりか、」

と打微笑み、

「主人は、支那の福州の大商賈で、客は、其も、和蘭陀の富豪父子と、此の島の酋長なんですがね、こゝでね、皆がね、たゞ一ツ、其だけに就いて繰返して話して居たのは、——此のね、酋長の手から買取つて、和蘭陀の、其の貴公子が、此の家へ贈りものにした——然うね、お前さんの、あの、御先祖と云ふと年寄染みます、其の時分は少いのよ。出が王様の城だから、姫君の鸚鵡が一羽。

全身緋色なんだつて。……

此が、哥太寛と云ふ、此家の主人たち夫婦の秘蔵娘で、今年十八に成る、哥鬱賢と

云うてね、島第一の美しい人のものに成つたの。和蘭陀の公子は本望でせう……実は其が望みだつたらしいから——

鸚鵡は多年馴らしてあつて、土地の言語は固よりだし、瓜哇、勃泥亜の訛から、馬尼刺、錫蘭、沢山は未だなかつた、英吉利の語も使つて、其は……伶俐な娘をはじめ、誰にもよく解るのに、一ツ人の聞馴れない、不思議な言語があつたんです。

以前の持主、二度目のはお取次、一人も仕込んだ覚えはないから、其の人たちは無論の事、港へ出入る、国々島々のものに尋ねても、まるつきし通じない、希有な文句を歌ふんですがね、調べて見ると、其が何なの、此の内へ来てから、はじまつたと分つたんです。何かの折の御馳走に、哥太寛が、——今夜だわね——其の人たちを高樓に招いて、話の折に、又其の事を言出して、鸚鵡の口真似もしたけれども、分らない文句は、鳥の声とぼツかし聞えて、傍で聞く黒人たちも、妙な顔色で居る所……ね……

其処へですよ、奥深く居て顔は見せない、娘の哥鬱賢から、こしもとが一人使者で出ました

……」

「差出がましうござんすが、お座輿にもと存じて、お客様の前ながら、申上げます、とお嬢様、御口上。——内に、日本と云ふ、草菴の若い人が居りませう……ふと思ひ着きました。あのものをお召し遊ばし、鸚鵡の謎をお問合はせなさいましては如何でせうか、と其のが陳べたんです。

鸚鵡は、尤も、お嬢さんが片時も傍を離さないから、席へ出ては居なかつたの。

でね、此を聞くと、人の好い、気の優しい、哥太寛の御新姐が、おゝ、と云つて、袖を開く……主人もはた、と手を拍つて、」

とて、夫人は椅子なる袖に寄せた、白鞆を軽く圧へながら、

「先刻より御覧に入れた、此なる剣、と哥太寛の云つたのが、——卓子の上に置いた、蠟塗、鮫鞆巻、縁頭、目貫も揃つて、金銀造りの脇差なんです——此の日本の剣と一所に、泯汰脳ミンダネオの土蚕どばんが船に積んで、売りに参つた日本人を、三年前に買取つて、現に下僕として使ひます。が、傍へも寄せぬ下働の漢なれば、剣は此処ここにありながら、其の事とも存ぜんんだ。……成程、呼べ、と給仕を遣つて、鸚鵡を此へ、と急いで嬢に、で、を立たせたのよ。

たゞ玉の緒のしるしばかり、髪は糸で結んでも、胡沙吹く風は肩に乱れた、身は痩せ、顔は寡れけれども、目鼻立ちの凜として、口許の緊つたのは、服装は何うでも日本の若草。黒人の給仕に導かれて、燈籠の影へ頭れたつけね——主人の用に商売ものを運ぶ節は、盗賊の用心に吃と持つ……穗長の槍をねえ、こんな場所へは出つけないから、突立てたまゝで居るんぢやありませんか。

和蘭陀のは騒がなかつたが、蕃蛇刺馬の酋長は、帯を手繰つて、長劍の柄へ手を掛けました。……此のお夥間です……人の売買をする連中は……まあね、槍は給仕が、此も慌てて受取つたつて。

静かに進んで礼をする時、牡丹に八ツ橋を架けたやうに、花の中を廻り繞つて、奥へ続いた高樓の廊下づたひに、黒女の前後に三人属いて、浅緑の衣に同じ裳をした……面は、雪の香が沈む……銀の櫛照々と、両方の鬢に十二枚の黄金の簪、玉の瓔珞はらくくと、お嬢さん。耳鉗、腕釧も細い姿に、抜出るらしく鏘々として……あの、さらくと歩行く。

母親が曲を立つて、花の中で迎へた処で、哥鬱賢は立停まつて、而して……桃の花の重つて、影も染まる緋色の鸚鵡は、お嬢さんの肩から翼、翩然と母親の手に留まる。

其を持つて、卓子テエブルに帰つて来る間に、お嬢さんの姿は、こしもとみつの三ツの黒い中に隠れたんです。

鸚鵡は誰にも馴染なじみだわね。

卓子テエブルの其処そこへ、花片はなびらの翼を両方、燃立もえたつやうに。」

と云ふ。声さへ、其の色。暖炉だんろの瓦斯がすは颯々さつさつと霜夜しもよに冴さえて、一層いんこう殷紅いんこうに、且かつつ鮮せ麗んれいなるものであつた。

「影を映した時でした……其の間に早はやや用の趣おもむきを言ひ聞かされた、髪かみの長い、日本の若い人の、熟じつと見るのと、瞳ひとみを合せたやうだつたつて……

若い人の、窠やうれ顔かほに、血の色ちのいろが颯さつと上のぼつて、——国々島々、方々が、いづれもお分りのないとある、唯一ただ一句、不思議な、短かい、鸚鵡の声と申すのを、私わたくしが先へ申して見ませう……もしや?……

——港で待つよ——

と、恚こう申すのではござりませぬか、と言ひも未まだ果てなかつたに、島の毒蛇どくじゃの呼吸いきを消して、椰子やしの峰、鰐わにの流ながれ、蕃蛇ばんじゃらまん刺馬すずの黄色な月も晴れ渡る、世にも朗ほがらかな涼すずしい声して、

——港で待つよ——

と、羽を靡かして、其の緋鸚鵡が、高らかに歌つたんです。

釵の揺ぐ氣勢は、彼方に、お嬢さんの方にして……卓子の其の周囲は、却つて寂然となりました。

たゞ、和蘭陀の貴公子の、先刻から娘に通はす碧を湛へた目の美しさ。

はじめて鸚鵡に見返して、此の言葉よ、此の言葉よ！日本、と真前に云ひましたとき。

五

「真個、其の言に違はないもんですから、主人も、客も、座を正して、其のいはれを聞かうと云つたの。」

——港で待つよ——

深夜に、可恐い黄金蛇の、カラ／＼と這ふ時は、土蛮でさへ、誰も皆耳を塞ぐ……其の時には何うか知らない……そんな果敢い、一生奴隷に買はれた身なのに、一度も泣い

た事を見ないと云ふ、日本の其の少い人は、今其の鸚鵡の一言を聞くか聞かないに、槍をそばめた手も恥かしい、ぼつたり床に、俯向けに倒れて漕々と泣くんです。

お嬢さんは、伸上るやうに見えたの。

涙を払つて——唯今の鸚鵡の声は、私が日本の地を吹流されて、恚うした身に成りま

す、其の船出の夜中に、歴然と聞きました……十二一重に緋の袴を召させられた、百

人一首と云ふ歌の本において遊ばす、貴方方にはお解りあるまい、尊い姫君の絵姿に、

面影の肖させられた御方から、お声がありました、其の言葉に違ひありません。

いま赫耀とした鳥の翼を見ますると、射らるゝやうに其の緋の袴が目に見えたのでござ

ります。——と此から話したの——其の時は、船の女神さまのお姿だったんです。

若い人は筑前の出生、博多の孫——と云ふ水主でね、十九の年、……七年前、福岡藩

の米を積んだ、千六百石の大船に、乗組の人数、船頭とも二十人、宝暦午の年十月

六日に、伊勢丸と云ふ其の新造の乗初です。先づは滞りなく大阪へ——それから豊前

へ廻つて、中津の米を江戸へ積んで、江戸から奥州へ渡つて、又青森から津軽藩の米を託

つて、一度品川まで戻つた処、更めて津軽の材木を積むために、奥州へ下つたんです——

其の内、年号は明和と成る……元年申の七月八日、材木を積済まして、立火の小泊から

帆を開いて、順風に沖へ走り出した時、一人、櫓から倒に落ちて死んだのがあつたんです、此があやかしの憑いたはじめなのよ。

南部の才浦と云ふ処で、七日ばかり風待をして居た内に、長八と云ふ若い男が、船宿小宿の娘と馴染んで、明日は出帆、と云ふ前の晩、手に手を取つて、行方も知れず……一寸……駈落をして了つたんだわ！」

ふと蓮葉に、ものを言つて、夫人はすつと立つて、対丈に、黒人の西瓜を避けつゝ、鸚鵡の籠をコト／＼と音信れた。

「何う？多分其の我まゝな駈落ものの、……私は子孫だ、と思ふんだがね。……御覽の通りだからね、」

と、霜の冷い色して、
「でも、駈落ちをしたお庇で、無事に生命を助かつたんです。思つた同士は、道行きに限るのねえ。」

と力なささうに、疲れたらしく、立姿のなり、黒棚に、柔かな袖を掛けたのである。

「あとの大勢つたら、其のあくる日から、火の雨、火の風、火の浪に吹放されて、西へ

——西へ——毎日々々、百日と六日の間、鳥の影一つ見えない大灘を漂うて、お米を二升に水一斗の薄粥で、二十人の一日の生命を繋いだのも、はじめの内。くまびきさへ釣れないもの、長い間に漁したのは、一二尋ばかりの鱧が一疋。さ、其を食べた所為でせう、お腹の皮が蒼白く、鱧のやうにだぶだぶして、手足は海松の枝の枯れたやうになつて、漸つと見つけたのが鬼ヶ島、——魔界だわね。

然うして地を見てからも、島の周圍に、底から生えて、幹ばかりも五丈、八丈、すく／＼と水から出た、名も知れない樹が邪魔に成つて、船を着ける事が出来ないで、海の中の森の間を、潮あかりに、月も日もなく、夜昼七日流れたつて言ふんですもの……

其の時分、大きな海鼠の二尺許りなのを取つて食べて、毒に當つて、死なないまでに、こはれごはれの船の中で、七顛八倒の苦痛をしたつて言ふよ。……まあ、どんな、心持だつたらうね。渴くのは尚ほ辛くつて、雨のない日の続く時は帆布を拵げて、夜露を受けて、皆が口をつけて吸つたんだつて——大概唇は破れて血が出て、——助かつた此の話の孫一は、余り激しく吸つたため、前歯二つ反つて居たとき。……

お聞き、島へ着くと、元船を乗棄てて、魔国とこゝを覚悟して、死装束に、髪を撫着け、衣類を着換へ、羽織を着て、紐を結んで、てん／＼が一腰づゝ嗜みの脇差

をさして上陸つたけれど、飢渴ゑた上、毒に当つて、足腰も立たないものを何うしませう？……」

六

「三百人ばかり、山手から黒煙を揚げて、羽蟻のやうに渦巻いて来た、黒人の槍の石突で、浜に倒れて、呻吟き悩む一人々々が、胴、腹、腰、背、コツくと突かれて、生死を験されながら、抵抗も成らず裸にされて、懐中ものまで剥取られた上、親船、端舟も、斧で、ばらばらに摧かれて、帆綱、帆柱、離れた釘は、可忌い禁厭、可恐い呪詛の用に、皆奪られて了つたんです。……」

あとは残らず牛馬扱ひ。それ、草を雀れ、馬鈴薯を掘れ、貝を突け、で、焦げつくやうな炎天、夜は毒蛇の霧、毒虫の霏の中を、鞭打ち鞭打ち、こき使はれて、三月、半歳、一年と云ふ中には、大方死んで、あと二三人だけ残つたのが一人々々、牛小屋から掴み出されて、果しも知らない海の上を、二十日目に島一つ、五十日目に島一つ、離れ／＼に方々へ売られて奴隷に成りました。

孫まご一いちも其そのの一人ひとりだつたの……此この人はね、乳みも涙なみも漲みなぎり落おちる黒女くろめの俘囚とりこと一いつしよ所に、島々しまづらを目見めみ得えに廻まつて、其そのの間あいだには、日本にっぽん、日本にっぽんで、見世みよものの小屋こやに置おかれた事こともあつた。一度いちど何処どこか方角かたかくも知しれない島しまへ、船ふねが水みづ汲くみに寄よつた時とき、浜はまつゞきの椰子やしの樹きの奥おくに、恚こうね、透とかすと、一人ひとり、コトンとんくと、寂さびしく粟あわを搗ついて居ゐた亡もうじや者じやがあつてね、其そのが黥間なにかまの一人ひとりだつたのが分わつたから、声こゑを掛かけると、黒人くろんぼが突つ倒たおして、船ふねは其そののまゝ朱しゆいろ色の海うみへ、ぶくくと出いたんだとさ……可哀あわれ相あねえ。

まだ可哀あわれなのはね、一いつしよ所に連廻つれまはられた黒女くろめなのよ。又何またとか云いふ可恐おそろしい島しまでね、人が死しぬ、と家属かぞくのものが、其そのの首くびは大事だいじに蔵しまつて、他人たにんの首くびを活いきながら切きつて、死人しにんの首くびへ継合つぎあはせて、其そのを埋うずめると云いふ習慣ならわしがあつて、工面くめんのいゝのは、平常ふだんから首代くびしろの人間にんげんを放はなし飼かいに飼かつて置く。日本にっぽんぢや身みがはりの首くびと云いふ武士道ぶしだうとかがあつたけれど、其そのの島しまぢや遁にげると不可いけないからつて、足あしを縛しばつて、首くびから掛かけて、股またの間あいだへ鉄てつの分銅ぶんどうを釣つるんだつて……其その処ところへ、あゝ、黒くろい、乳ちちの膨ふれた女おんなは買かはれたんだよ。

孫まご一いちは、天あまの助すけか、其そのの土地ちでは売うれなくつて——とうとう蕃蛇ばんじゃ刺馬らあまんで方かたが附ついた——

と云いふ訳わけなの……

話は此なんだよ。」

夫人は小さな吐息した。

「其のね、ね。可悲い、可恐い、滅亡の運命が、人たちの身に、暴風雨と成つて、天地とともに崩掛らうとする前の夜、……風はよし、風はよし……船出の祝ひに酒盛したあと、船中残らず、ぐつすりと寝込んで居た、仙台の小淵の港で——霜の月に独り覺めた、年十九の孫一の目に——思ひも掛けない、艫間の神龕の前に、凍つた竜宮の几帳と思ふ、白氣が一筋月に透いて、向うへ大波が畝るのが、累つて凄く映る。其の蔭に、端麗さも端麗に、神々しさも神々しい、緋の袴の姫が、お一方、孫一を一目見なすつて、

——港で待つよ——

と其の一言。すらりと背後向かるゝ黒髪のため、帆柱より長く靡くと思ふと、袴の裳が波を摺つて、月の前を、さらりと、かけ波の沫の玉を散らしながら、衝と港口へ飛んで消えるのを見ました……あつと思ふと夢は覺めたが、月明りに霜の薄煙りがあるばかり、船の中に、尊い香の薫が残つたと。……

此の船中に話したがね、船頭はじめ——白痴め、婦に誘はれて、駈落の真似がしたい

のか——で、船は人ぐるみ、然うして奈落へ逆に落込んだんです。

まあ、何と言はれても、美しい人の言ふことに、従へば可かつたものをね。

七年幾月の其の日はじめて、世界を代へた天竺の蕃蛇刺馬の黄昏に、緋の色した鸚鵡の口から、同じ言を聞いたので、身を投臥して泣いた、と言ひます。

微妙き姫神、余りの事の靈威に打れて、一座皆跪いて、東の空を拝みました。

言ふにも及ばない事、奴隷の恥も、苦みも、孫一は、其の座で解けて、娘の哥鬱賢が、賸した其の鸚鵡を肩に据ゑて。」

と籠を開ける、と翻然と来た、が、此は純白雪の如きが、嬉しさに、颯と揚羽の、羽裏の色は淡く黄に、嘴は珊瑚の薄紅。

「哥太寛も饑別しました、金銀づくりの脇差を、片手に、」と、肱を張つたが、撓々と成つて、紫の切も乱るゝまゝに、弛き博多の伊達巻へ。

肩を斜めに前へ落すと、袖の上へ、腕が込つた、……月が投げたるダリヤの大輪、白々と、揺れながら戯れかゝる、羽交の下を、軽く手に受け、清しい目を、熟と合はせて、
「……あら嬉しや！三千日の夜あけ方、和蘭陀の黒船に、旭を載せた鸚鵡の緋の色。めでたく筑前へ帰つたんです——

お聞きよ此を！ 今、現在、私のために、荒浪に漂つて、蕃蛇刺馬に辛苦すると同じやうな少い人があつたらね、——お前は何と云ふの！何と言ふの？

私は、其が聞きたいの、聞きたいの、……たとへばだよ……お前さんの一言で、運命が極ると云つたら、——

と、息切れのする臉が颯と、気を込めた手に力が入つて、鸚鵡の胸を圧したと思ふ、嘴を蹴いて開けて、カツキと噛んだ小指の一節。

「あ、」と離すと、爪を袖口に縋りながら、胸毛を倒に仰向きかゝつた、鸚鵡の翼に、垂々と鮮血。振離すと、床まで落ちず、宙ではらりと、影を乱して、黒棚に、バツと乗る、と驚駭に衝と退つて、夫人がひたと遁構への扉に凭れた時であつた。

呀！西瓜は投げぬが、がつくり動いて、ベツカツコ、と目を剥く拍子に、前へのめらうとした黒人の其の土人形が、勢余つて、どたりと仰状。ト木彫のあの、和蘭陀靴は、スポンと裏を見せて引顛返る。……煽をくつて、論語は、ばらばらと暖炉に映つて、赫と朱を注ぎながら、頁を開く。

雪なす鸚鵡は、見る／＼全身、美しい血に染つたが、目を眠るばかり恍惚と成つて、朗かに歌つたのである。

——港で待つよ——

時に立窺たちすくみつゝ、白鞞しらさやに思はず手を掛けて、以ての外ほかかな、怪異けいなるものども拳ふ動るまいを屹きと視みた夫人が、忘れたやうに、柄つかをしなやかに袖まに捲まいて、するりと帯おびに落おして、片手かたてにおくれ毛けを払はひもあへず……頷うなずいて……莞爾にっこりした。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「中央公論」

1912（大正元）年11月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

印度更紗

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>